

名古屋大学部活・サークルの国際化に向けて

国際教育交流センターアドバイジング部門

安部 伸子・柴垣 史・坂田 亜紀

「部活に入部したいがどこで情報が得られるか」等、留学生からの部活・サークルについての問い合わせが増加している。正課外活動は多様な学生が学び合い、交流の機会を創出できる貴重な場所であり、留学生にとっては大学への所属意識を高め、留学生活への適応を助ける重要な経験となろう。しかし実際には、部活・サークルへの参加は課題も多く、継続的な活動をしている留学生の数はまだ少ない。そのため、名古屋大学における部活・サークルの活動状況、留学生の受入れ状況、留学生受入れに関して学生が期待する大学からの支援を調査することとした。以下に実施内容を述べる。

【調査方法】

学生団体の実態調査であり、学生の視点や意見を尊重したく、3名の学生（以下、学生スタッフ）を短期雇用。学生スタッフとアドバイジング部門教職員と共同でアンケートを作成。2019年10月から2020年12月にわたり、学生支援課の協力を得て、本学の公認団体である体育会55団体、文サ連62団体（計117）へWebアンケートへの回答協力を依頼した。回答のあった団体（回答率33%）のうち、面接による聞き取りを承諾した団体の代表メンバーを対象に、学生スタッフがアンケート結果をもとに半構造化面接を実施した。聞き取り調査開始前に団体の代表者に同意書へ記入してもらい、内容を記録した。

課外活動は学生主体の活動であるため、聞き取りが留学生受入れやそのための取り組みを強要するような印象を与えぬよう、留学生との活動経験の意味付けにおいて調査者側の意図が影響しないよう配慮した。さらに、学生スタッフが聞き取り調査を担当することで、学生同士でより率直な意見の吸い上げが可能となるよう配慮した。面接終了後には学生スタッフと担当教職員で、得られた回答について、内容確認と振り返りを行った。

【結果】

本学の部活・サークルで留学生が入部しているのは、

回答のあった39団体中8団体であった。全体のうち、今後留学生の受入れに対しては、歓迎する（27%）、受入れ可能（37.8%）、受入れたいが不安がある（21%）、受入れは難しい（16.2%）、回答なし（10%）の結果であった。留学生を歓迎する、受入れ可能と回答した団体でも、不安や難しいと回答していた。不安とした内容は言語面が一番多く、次に留学生の在籍期間であった。良い面については、お互いの文化や言語について学ぶことができる等が挙げられた。留学生の身体能力に期待したいという声もあった。

さらに、プロジェクトメンバーでの振り返り後、学生スタッフ各人の視点から調査内容を分析し、今後の活動支援策について検討を依頼。下記に内容を一部記す。

・〈部活・サークルにおける異文化適応への意識変容・行動への注目〉多くの団体が異文化の存在を意識するものの、日本人学生が主導権を握る状態であった。その一方で、組織の中に多様性が存在することを認め意識しながら、日本人学生、留学生どちらの文化でもない第3の文化が芽生えつつある状態が認められる団体もあった。

・〈留学生が部活・サークルに継続的に参加する定着フローの検討〉留学生が継続して活動に参加する要因として、使用言語、活動そのものへの意欲、部員との人間関係が挙げられる。活動への意欲は個人によるところもあるが、部内での不要な摩擦軽減においては適切な情報提供等、異文化への理解と柔軟性を高められるような支援は有益となりうる。

・〈大学の背後支援の有用性〉活動において起こりうる具体的な問題や解決策についての事例を集め双方に紹介する、困ったときの相談窓口を設置する等、大学が仲介的役割を担うことの意義は高い。

【成果と今後の課題】

今回の調査で日本人学生と留学生と一緒に活動する上での課題が把握できた。日本人学生が問題とするのは言語などの表層的なものであり、多様な文化の存在

を認めるものの日本文化に留学生が合わせることを期待している傾向にあった。学生が留学生と関わる度合によっても意見が大きく異なることも分かってきた。今後はさらに留学生に対し、部活・サークルへの参加活動状況、必要とする支援を知るため、調査の実施を予定している。留学生の在籍身分／期間等の関係で、大学公認の部活・サークルへの加入条件と合わず、参加が難しいケースがある。同じ興味・関心を持つ学生同士で活動する大学非公認の団体も多数あるため、それらの情報収集・発信も検討する必要がある。今回得た本学の部活・サークルの情報や、日本における部活・サークルの概要を、留学生に紹介する機会も必要であろう。また、留学生の関心が高い日本文化やボランティア活動をする団体の紹介イベント開催も、留学生に活動への参加を促し、学生たちの交流の場を創出することが期待できる。1月以降のコロナウイルス感染症の影響でイベント開催を断念したが、状況の終息後、大学と団体が協働し実施していけるよう計画したい。多様な学生たちの共修が進む昨今、大学には国際化をさらに進め、学生生活への満足度を高める責務がある。多文化間の学びの目的においては、正課授業と正課外活動は平行して価値があり (Leask & Carroll, 2011)、大学の国際化はすべての学生を対象として想

定すべき (坂本, 堀江, 米澤, 2017) と言われている。今回の調査は、すべての学生を含む正課外活動である部活・サークル団体を対象としている点で、意義あるものであった。正課授業で行われる共修と正課外活動が両輪となって、この調査を通して得られた結果をもとに、学生の主体的活動を尊重しながら始められる支援が、学内すべての学生の内なる国際化につながることを期待する。

プロジェクトメンバー：和田尚子, 安部伸子, 坂田亜紀, 柴垣史 (アドバイジング部門), 木村健吾 (工学研究科), 嶋田耕太郎 (国際開発研究科), 塚田麻実 (人文学研究科) (2020.3 現)

参考文献

- Leask, B. & Carroll, J. (2011) Moving beyond 'wishing and hoping': internationalisation and student experiences of inclusion and engagement. *Higher Education Research & Development*, 30, 647-659.
- 坂本利子, 堀江未来, 米澤由香子 編著 (2017) 『多文化間共修 多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する』学文社